

大阪市立大学栄原ゼミにおける写経所文書研究

Study of *Shakyojo* Documents by Sakaehara Seminar, Osaka City University
SAKAEHARA Towao

栄原永遠男

栄原ゼミの前段階

筆者は、1981年（昭和56）4月に大阪市立大学文学部に助教授として着任した。まず、大阪市立大学における筆者と正倉院文書とのかかわりについて述べる（以下、適宜付表を参照されたい）。

着任後数年の間は、学部の「国史特講」や大学院（マスターコース MC）の「日本社会史研究」などの授業で、散発的に講義として正倉院文書を採りあげたが、ゼミ形式の授業は行っていなかった。

その間、1983年度（昭和58）後期に、皆川完一氏の御好意で、いわゆる皆川ゼミに出席させていただいた。これは、翌84年度前期にも、立教大学文学部野田嶺志氏のもとへの内地留学の形で継続することができた。その成果の一部は、84年度後期の授業で講義の形で示した。しかし、その後の3年間（1985～87年度）は、かえって授業の題材として正倉院文書を取りあげることはほとんどなかった。

栄原ゼミの開始

1988年度（昭和63）から、筆者は大学院（MC）において「国史学研究演習」「国史学研究」を担当することになった。これがいわゆる栄原ゼミのはじまりである。これらは制度上はMCの授業であったが、DCの院生も出席し、実態はMC・DCを通じたゼミであった。

ゼミ第1年度目は、ちょうど前年3月に東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録 一 正集』（東京大学出版会）が刊行され、宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』（八木書店）が出版され始めた直後に当たる。これを受けて、報告担当の大学院生が、正集のうちから1巻を選び、『正倉院文書目録』『正倉院古文書影印集成』の記載を確認する形で報告し、その報告について検討する、という形で進めた。

第2年度目の1989年度（平成1）は、『正倉院文書目録 二 続修』（東京大学出版会）が続いて1988年3月に刊行されたことから、選択の対象を正集のみから正集・続修にまで広げた。

このように、正集・続修のなかから1巻を選んで検討するというやり方は、筆者が参加していた頃の皆川ゼミのやり方である。筆者は、これにならって栄原ゼミでも同じ方式をとったのである。

皆川ゼミは、当初、上記『正倉院文書目録 一 正集』の刊行の準備として、皆川氏が作成したその原稿を検討することを目的として始められた、という。このためゼミ参加者には、そのコピー

（「目録原稿」と称されていた）が配布された。報告担当者は、正集のなかから任意の巻を選び、断簡の配列を検討することを通じて、「目録原稿」の検討を行っていった。栄原ゼミでは、当初このやり方を踏襲したわけである。

しかし、栄原ゼミでは、はじめから写経所文書の研究に重点を置いていた。これに対して正集は、主として公文類に注目して、天保年間に穂井田忠友によって整理されたものである。このため、その1巻を選んで検討するという方式では、写経所文書の検討にそぐわないところが生じる。

ゼミ方式の転換

このため、第3年度目の1990年（平成2）からは、やり方を変更して、個々の写経事業を検討することを主眼とし、そのために『正倉院文書目録』の接続情報や『正倉院古文書影印集成』の諸情報を利用することとした。そして、これを個別写経事業研究と称した。

その意図は、第1に、正倉院文書の「整理」の過程でバラバラにされ、なかにはその性格がわからなくなってしまう多くの断簡を整理することにある。写経所では、新たな写経事業を始めるごとに、原則として新しい帳簿を用意してそれに記帳し始める。このことに着目すると、ある写経事業について検討を進めることによって、その写経事業に関わる断簡を集めて復原案を作ることになる。つまり、個別写経事業の研究を進めるということは、とりもなおさず、断簡の山を個別写経事業ごとに仕分けていき、性格不明断簡がどの写経事業に関わるものであるのかを明らかにすることを意味する。

意図の第2は、どのような個別写経事業が行われたのかを把握することは、その個別写経事業ごとの関係文書を把握することにほかならない。それは、写経所文書がどのような文書群から成りたっているのか、その構造の一部を明らかにしていくことである。すなわち、写経所文書の構造の把握をめざしているのである。

このように個別写経事業の研究を進めていくに際して重要な目安となったのが、藺田香融「南都仏教における救済の論理（序説）―問写経の研究―」（日本宗教史研究会編『救済とその論理』日本宗教史研究4、法蔵館、1974年4月）に付されている「天平年間における問写経一覧」という表（いわゆる藺田目録）であった。

これは、天平3年（731）から天平宝字8年（764）の間に行われた問写経212件について、それぞれ「No.」「経論名（部・巻数）」「開始～終了」「備考」「出典巻・頁」の5項目を表示したものである。ゼミでは、この「No.」を「藺田ナンバー」と称して、個別写経事業のIDとして用いることとした。

ゼミは、おおむね次のような手順で行われた。①ゼミ報告担当者は、藺田目録のなかから任意の個別写経事業を選ぶ。②その写経事業に関する断簡を収集する。③その接続関係を確かめて断簡を配列する。④接続に関する情報がない場合（『正倉院文書目録』『正倉院古文書影印集成』が未刊行）は配列案を推定する。⑤短冊（断簡の配列、表裏関係を一覧するための図表）を作成する。⑥その個別写経事業の全体像を示すレジюмеおよび資料を作成して報告する。⑦その報告について検討し、議論する。

写経所文書研究会の発足

このような形のゼミは、その後栄原の定年退職後2年目の2012年度まで約22年間にわたって続けられた（全体としては25年間）。その間、1994年度からは、DCの授業としても開講されることとなり、名実ともに大学院全体のゼミとして位置付けられることとなった。

ゼミにおいて個別写経事業の研究が蓄積し、写経所文書に対する理解が次第に深まるなかで、ゼミの成果を何らかの形で記録しておきたい、あるいは公表したいという気持ちが、栄原を含めてゼミ参加者のなかに高まっていった。どのようにしたらよいか、いろいろと相談をくりかえすなかで、ゼミとしてそれを行っていくことには、いろいろな制約があることも明らかとなった。

そこで、ゼミはゼミとして継続しながら、それとは別に、ゼミとほぼ同メンバーで研究会を作ることとなった。この研究会の第1回目は、2000年（平成12）1月18日に行われたが、その時には「間写経研究会」という名称であった。この名称は3月末まで用いられていたことが確かめられるが、同年7月1日の第2回目には「写経所文書研究会」という名称に改められている。その後2003年10月まで続けられ、後述のSOMODA（ソモダ、後述）の準備作業が本格化したため、そこに吸収された。

この研究会では、過去のゼミのレジュメ・配付資料を収集整理するとともに、個別写経事業に関する研究発表、ゼミの成果の公表の仕方など、多面的にわたって検討が進められた。その中で、データベースを作成して、Web上で公開するという方向性が次第に大きな流れとなっていった。そして、2002年の前半ごろには、データベース科研を申請することが、写経所文書研究会ならびにゼミのメンバーによって合意されるに至った。

SOMODA 科研

正倉院文書に関わっている機関には、宮内庁正倉院事務所をはじめ、東京大学史料編纂所・国立歴史民俗博物館があり、それぞれに研究の蓄積がある。Web上で公開するとなると、これらの諸機関の御理解と御協力が不可欠である。そこで、2002年の後半から、それぞれに御説明と御相談を始めた。さいわいいずれも御理解を賜り、覚書を取り交わすことができ、また責任者から承認のお言葉をいただくことができた。

こうして、2003年の前半は、SOMODA（正倉院文書データベース、Shosoin Monjyo Databaseの略称）と名づける予定のデータベースの設計についての議論を繰り返えし、後半に申請書を提出した。この申請はさいわい採択され、2004～6年度の3年度にわたって作業が進められ、2007年3月に公表した。

解移牒会と写経事業目録の作成

これとは別に、栄原とゼミのメンバーの一部、国語学・国文学の研究者との間で、正倉院文書にふくまれるいくつかの解移牒案を読んできたいという希望がかねてからあった。これが具体化し、2007年（平成19）5月から「解移牒会」という名称でスタートし、毎月1回のペースで現在も継続中である（2014年3月現在でちょうど70回）。

これは、ゼミや写経所文書研究会とはいちおう別のものである。しかし、メンバー的に重なる部分もあり、また栄原がかかわる正倉院文書の研究としても重要なものであるので、記録にとどめる意味で、ここに記しておきたい。

栄原は、2010年3月末をもって、大阪市立大学を定年退職したが、その後も特任教授として授業を担当することが認められた。これにより、栄原ゼミは2013年3月まで継続して終了した。これにともない、栄原ゼミの成果をまとめることが問題となった。

そこで、2012年度（平成24）から、藺田目録の改定作業にとりかかった。そこに、ゼミと写経所文書研究会における個別写経事業研究の成果を盛り込む計画である。たとえば藺田目録は、原則として私願経を省いているが、ゼミや写経所文書研究会では、これらについての研究発表も行われた。また、訂正や欠落の指摘もなされてきた。これらを盛り込んだ改訂版を作ることができれば、栄原ゼミやこれに関係する研究会におけるこれまでの多くの報告を活かすことになるし、今後の写経所文書の研究に資するところが大きいと考えたのである。

この作業は、結局正倉院文書の断簡を見なおす作業となり、思いのほかの時間と労力をかけながら、2014年4月から3年度目に入っている。現時点では、藺田目録改訂の域を超えて、写経事業目録として蓄積されつつある。

栄原ゼミ年表

| 年 | 紀 | 『正倉院文書目録』 | 『正倉院古文書影印集成』 | | 栄原および栄原ゼミ等 |
|------|------|-----------|----------------|---------------------|--------------------------|
| 1981 | 昭和56 | | | | 4 大阪市立大学着任 |
| 1982 | 昭和57 | | | | |
| 1983 | 昭和58 | | | | 10 皆川ゼミ後期出席 |
| 1984 | 昭和59 | | | | 4 皆川ゼミ前期出席 |
| 1985 | 昭和60 | | | | |
| 1986 | 昭和61 | | | | |
| 1987 | 昭和62 | 3 正集 | | | |
| 1988 | 昭和63 | 3 続修 | 5 影印1 | 正集1～21 | 4 栄原ゼミ開始 |
| 1989 | 平成1 | | 1 影印3 | 正集1～21裏 | |
| 1990 | 平成2 | | 1 影印2 9 影印4 | 正集22～45 正集22～45裏 | |
| 1991 | 平成3 | | 4 影印5 | 続修1～25 | |
| 1992 | 平成4 | | 2 影印7 | 続修1～25裏 | |
| 1993 | 平成5 | | 6 影印6 | 続修26～50 | |
| 1994 | 平成6 | 5 続修後集 | 3 影印8 | 続修26～50裏 | |
| 1995 | 平成7 | | 8 影印9 | 続修後集1～22 | |
| 1996 | 平成8 | | 8 影印10 | 続修後集23～43 | |
| 1997 | 平成9 | | 8 影印11 | 続修後集1～43裏 | |
| 1998 | 平成10 | | | | |
| 1999 | 平成11 | 3 続修別集 | 8 影印12 | 続修別集1～22 | |
| 2000 | 平成12 | | 12 影印13 | 続修別集23～50 | 1 写経所文書研究会開始 |
| 2001 | 平成13 | | 8 影印14 | 続修別集1～50裏 | |
| 2002 | 平成14 | | | | |
| 2003 | 平成15 | | | | |
| 2004 | 平成16 | 5 塵芥 | 12 影印15 | 塵芥1～20 | 4. SOMODA 科研 |
| 2005 | 平成17 | | | | 4. SOMODA 科研 |
| 2006 | 平成18 | | 1 影印16 | 塵芥21～39 | 4. SOMODA 科研 |
| 2007 | 平成19 | | 8 影印17 | 塵芥1～39裏他 | 3. SOMODA 公表 5 解移牒会開始 |
| 2008 | 平成20 | | | | |
| 2009 | 平成21 | | | | |
| 2010 | 平成22 | 3 続々修1 | | | |
| 2011 | 平成23 | | | | |
| 2012 | 平成24 | | | | 4 藺田目録改訂開始 |
| 2013 | 平成25 | | | | 3 栄原ゼミ終了 |
| 2014 | 平成26 | | | | |

(大阪市立大学大学院文学研究科，人間文化研究機構連携研究員)

(2014年1月7日受付，2014年5月26日審査終了)